書 評

**Chetwynd, Josh and Belton, Brian A. (2007).
*British Baseball and the West Ham Club: History of a 1930s
 Professional Team in East London, McFarland.*[†]**

石 原 豊 一*

Toyokazu ISHIHARA*

そろそろ巷では、ロンドン五輪のことが話題にのぼっている。本稿が公刊されている頃には、日本のメダルの行方も決まり、次回大会に向けての競技の変更も検討されているかもしれない。前北京大会後に除外された野球についても、復活に向けた具体策が取り沙汰されていることだろう。ここで英国に展開されたプロ野球リーグの歴史を叙述した5年前発刊の本書を紹介する理由は、そのタイトルからご理解いただけたと思う。野球競技が除外されてしまった今回の五輪が開かれた英国には、知られざる野球の歴史があったのだ。それを発掘したのが本書である。

ところで、野球の初代世界チャンピオンはこの国かご存じだろうか。ワールド・ベースボール・クラシック(WBC)を念頭において日本と答える人もいるかもしれない。しかし、あまり知られてはいないが、アマチュアの統括組織である国際野球連盟(IBF)が主催するワールドカップは、実は長い歴史を持っている。

サッカーが、アマチュアリズムのまだ濃い「文化ヘゲモニー」¹⁾の時代に英国から世界中に広がったのに対し、米国生まれの野球は、マグガイヤーが、スポーツにおける英米のヘゲモニーの交替期であると指摘する戦間期から1950年代に世界的な普及を始め²⁾、現在グローバルな拡

大を遂げつつある。

しかし、世界規模でのトップリーグであるMLBが、域内でのリーグ戦興行に重きを置き、国際大会開催に消極的であったせいもあって(このことが五輪からの野球競技削除の主要因であるのだが)、このリーグの世界戦略の一環として始まったWBC以前においては、アマチュアによるワールドカップ(W杯)がこの競技における「世界一」を決める大会であった。

W杯は、第二次世界大戦のため実施されず幻に終わった東京五輪に備えた米国代表チームが、英国に遠征し、リバプールなどで行った5試合の対抗戦にその源流を求めることができる。このシリーズに英国代表は4勝1敗で勝ち越したのだが、東京五輪が中止されたため、IBFは、後付けでこのシリーズを「第1回ワールドカップ」に認定し、英国が野球における初代「ワールドチャンピオン」となった。五輪出場を想定した米国代表チームは、のちのメジャーリーガー2人を擁するなど、当時としてはアマチュア最高レベルのチームであったと言ってよく、それを下した英国代表チームは相当に実力があったと言える。但し、これにはからくりがあって、実際には、この英国代表メンバーのほとんどは二重国籍のカナダ人で占められていた。この点、現在のスポーツの商業化の

[†]原稿受付 2012年2月27日 原稿受諾 2012年4月17日

*立命館大学大学院 〒603-8577 京都府京都市北区等持院北町56-1

*Graduate School of Ritsumeikan University, 56-1, Tojiin-kitamachi, Kita-ku, Kyoto, Japan (603-8577)

下、英国籍を取得した外国生まれの選手が、「英国代表」として五輪に出場している現状を彷彿とさせる。

米国の「ナショナル・パスタタイム」である野球は、その誕生直後からプロ化を指向した点でアメリカンスポーツの典型と言ってよい競技である。このスポーツが、英国でプロリーグとして展開されていたことを知っている人は多くはないだろう。英米のヘゲモニーが後退しつつあったこの時代に、いかに野球がプロスポーツとして英国で展開されていたのかを、本書は描いている。

本書の冒頭に述べられている、野球草創期と言ってよい1890年という早い時期に野球というアメリカンスポーツがプロスポーツとして英国に伝わった事実には、多くの読者が驚くに違いない。本場米国において野球をビジネスに仕立て上げた、アルバート・ス波尔ディングも加わったこの試みは、時期尚早であったようで、このリーグはたった1年で消滅してしまう。その後、20世紀の初めまでは、野球は「冬の時代」を迎え、米国からメジャーリーグの遠征が行われることがあっても、物珍しさ以上の興味を英国人から引き出すことはできなかった。

本書では、1930年代に首都ロンドン周辺において展開されたプロリーグ、「ロンドン・メジャーリーグ」の「ウェストハム・ハンマーズ」の盛衰の過程を追うことにより、英国における、米国生まれの野球というスポーツの興亡の歴史が概観されている。

このリーグの成功を端緒に、英国は3リーグが展開されるプロ野球隆盛の時代を迎える。しかし、当時流行のグレイハウンドレース場を転用した、中堅までの距離が極端に短い球場などの決して良いとは言えないプレー環境や、迫りくる第二次世界大戦などから、これも長くは続かなかった。

しかし、このような外的要因だけが、英国プロ野球が短命に終わった原因ではないと評者は考える。スポーツの発展史におけるこの時代は、いまだ、強者の文化がその影響の及ぶ地域の人

びとに憧憬をもって迎え入れられた「文化ヘゲモニー」の時代であり、英米のヘゲモニーの交替期であったこの時期、欧州においては、英国スポーツが依然としてヘゲモニーを握っていたことを英国プロ野球の事例は示しているのである。

それに対し、現在のスポーツの拡大は、資本と結びついた収益の装置としてのそれであると言える³⁾。野球について言えば、このスポーツは北米トップリーグ・MLBの選手獲得網、マーケットの拡大という形で現在世界規模に拡大している。「文化ヘゲモニー」の時代には根付かなかった欧州（イタリア）や豪州にプロリーグが近年（2010年）発足した事実は、野球が現地で根付いているか否かよりも、そこに人材があり、マーケットとしての将来性があれば、プロ興行が行われることを示している。1990年代以降、世界各地で小規模なプロ野球リーグが勃興しているが、これらは、このような潮流を示すものであると言える。

野球のグローバル化研究についての第一人者と言ってよいKleinは、人材獲得網の拡大としての野球の普及に関して、裕福な欧州には可能性を見出さず、貧困脱出のツールとしての途上国における野球普及にその可能性を見出している⁴⁾。しかし、イタリアにおけるプロリーグの発足や、WBCへの参加国数の拡大と、それに伴う欧州における予選大会の開催（2012）などを考えると、MLBの人材獲得網、マーケットの拡大としての野球の普及は、彼の予想を超えた規模で現在進んでいると考えられる。

本書において紹介されている兼業選手の多さ、サッカーをはじめとする英国スポーツのオフシーズン・スポーツとしての競技、そして既存の施設を利用した興行などの半世紀以上前の英国プロ野球の諸相は、現在の先進国における小規模プロ野球リーグの運営におおいに示唆を与えるのではないか。なぜならば、現在の欧州におけるサッカーの巨大スポーツビジネス化を目の当たりにすると、この大陸において、野球がメジャースポーツになることは考えにくく、

今後の欧州における野球のプロ化, スポーツビジネス化の進展は, あくまで北米への人材供給を主目的とした, 「マイナーリーグ」としてのそれにとどまるものと考えられるからである. 実際, 「文化ヘゲモニー」の時代に野球が伝来しながら, 英国の文化的優勢のため, その普及が進まず, 現在においても, 野球がマイナースポーツにとどまっている豪州におけるプロリーグの展開は, かつての英国プロ野球に類似したものとなっている⁵⁾.

現在のスポーツの普及・拡大は, 資本との結びつきを強めたものに変容しているが, この変容の中, 欧州においては, MLBの直接間接の関わりの下, 各国で組織化が進み, 多くの米国人選手がプロ選手としてプレーしている. Kleinが否定的にとらえた野球における欧州市場は, 今後, 新たな選手プール, マーケティング先として大きな可能性を秘めているが, 自ら米国のマイナーリーグから欧州球界へとプレーヤーとして渡った著者による英国野球の源流を探究した本著は, 欧州に野球普及の基盤が存在するという点を明らかにしたという点において貴重であると言える.

本書評は財団法人松下幸之助記念財団2011年度研究助成を受けた研究の一部として執筆したものである.

参 考 文 献

- 1) グットマン・アレン, 谷川稔他訳; 『スポーツと帝国～近代スポーツと文化帝国主義』昭和堂, 1997.
- 2) マクガイヤー・ジョセフ, 東方美奈子・松村和則訳; 「スポーツ化とグローバル化: プロセス社会学のパースペクティブ」, 『スポーツ社会学研究』7, pp.13-22, 1999.
- 3) 石原豊一; 「グローバル化におけるスポーツ労働移動の変容－「ベースボール・レジーム」の拡大と新たなアスリートの越境－」, 立命館大学大学院国際関係研究科2011年度博士学位請求論文, 2011.
- 4) Klein, Alan: "Growing the Game: The Globalization of Major League Baseball", Yale University Press, 2006.
- 5) 石原豊一; 「ベースボールにみるグローバル化(3)－北米野球のリロケート先としてのオーストラリア」, 『立命館国際研究』25(1), ページ未定, 2012.